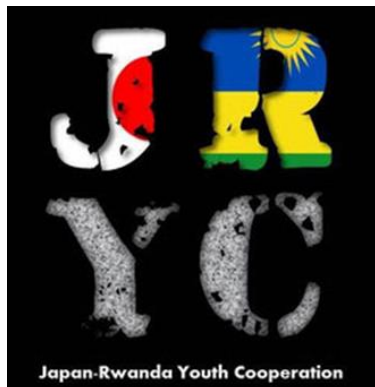
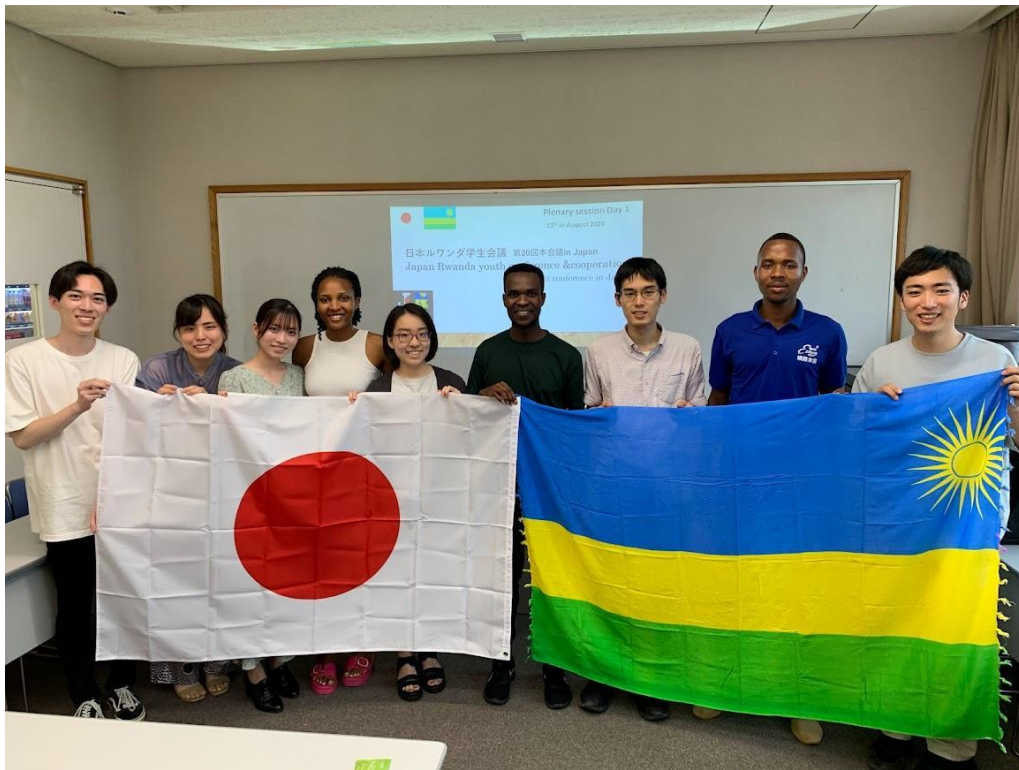


日本ルワンダ学生会議
Japan Rwanda Youth Cooperation

第 20 回本会議 in 日本
活動報告書



第1章 日本ルワンダ学生会議

はじめに
代表・副代表挨拶
後援者挨拶
団体概要・沿革

ルワンダ基本情報

はじめに

この度は「日本ルワンダ学生会議、第20回本会議活動報告書」を手にとってくださり、誠にありがとうございます。

このように本報告書を通じて、皆様に今夏に実施しました活動の報告ができますこと、大変嬉しく思います。本書は2023年8月7日から21日までの14日間、ルワンダ人学生3名を日本に招致し、彼らと共にを行った事業である「第20回本会議日本招致事業」の活動内容をまとめたものです。

第20回本会議では、「発展の弊害を再考して、両国の今後の発展のあり方を考える」というテーマを掲げ、テーマに関係する各所を訪問した他、本会議ではディスカッションを行いました。本活動はコロナ禍を経て5年ぶりのルワンダ人招致事業となり、オンラインでの画面越しの対話ではなく、同じ地で直接対面し交流を深めることができた二週間はメンバーにとってかけがえない経験となり、また非常に有意義な時間となりました。

さて、弊団体は日本とルワンダの相互理解を深めることを活動目的としていますが、互いに相手に対する理解を深めるということは、お互いに学び合うということでも考えています。「ルワンダを学ぶ、日本を学ぶ」という一方的な関係ではなく、「ルワンダに学び、日本に学ぶ」ということ、その双方に開けた学びの機会をこの度は日本で設けました。「発展の弊害」をキーワードにした背景には、経済成長を遂げ発展の道筋を確立させた日本を舞台にして、環境問題や開発など様々な視点で発展を持続化する必要性を顧みながら、発展の背景にある課題について日本人学生とルワンダ人学生が学び合うという目的がありました。なぜ相互理解が大切なのかという問いの下、活動を通して各々が答えを出すことができたのではないかと確信しています。

最後となりましたが、本事業は多くの方々のご協力とご支援があつて実現することができました。皆様にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。本書が、日本とルワンダにおける相互理解の一助となって頂けましたら、幸いです。

2023年10月
日本ルワンダ学生会議 メンバー一同

代表挨拶

はじめに、この度日本ルワンダ学生会議本会議を開催するにあたり、多大なご支援・ご協力をいただきました顧問の小峯先生をはじめ、訪問先の皆様、OBOGの皆様に変更して御礼申し上げます。また、双日国際交流財団様、三菱UFJ国際財団様には多額の活動助成金を支給していただきました。皆様のご支援・ご声援があり、このように実りの多い招致事業を実現させることができました。

この度の第20回本会議では、ルワンダメンバー全員にとって日本の地は初めてとなりました。事業期間中はとても慌ただしい日々が続きましたが、彼らが入国をした日に成田空港にて対面した時の感動を今でも覚えています。メンバーそれぞれが様々な困難を越えて「相互理解」を事業の成功というかたちにできたことは、私自身含め、非常に有意義な経験をなりました。

招致事業を通じてルワンダ人学生から感じたことがあります。それは、便利なものや新しいものに感動を覚えつつ、その工夫をどのようにすれば自国に広めることができるかということを中心に模索する姿でした。利便さの背景にある課題を考えることが本会議の目的であり私たちも共に学びましたが、自国の課題に向き合いながら日本に何かを学ぼうとする彼らと過ごした二週間はまさに、「相互理解」への窓口となる経験でした。メンバーを代表して、今後も私たち学生のそれぞれが活動を通し、日本とルワンダの発展を導く水先人として今後も貢献できますよう精進して参ります。

日本ルワンダ学生会議 代表
長澤 里桜(上智大学2年)

ルワンダ側代表挨拶

Claver

In the name Japan Rwanda Youth Cooperation Rwanda side, I am strongly indebted to the JRYC japan side especially Rio, the current coordinator. We are so appreciative to the public community for their hospitality and inner peaceful spirit. They welcomed us in different places we visited, be it in a family mart, restaurants, home stay, hotel,station,.....

However,I and my team strongly indebted to our home stay family of **KOSHIKAWA family and Reiko Raichi** san that openly with a light heart welcomed us in their home and took care of us during our stay. We really enjoyed sharing japanese dishes, taking us out for supermarket visits and traveling around to get to know the Japanese community deeper as it was one of our momentous activities during our stay.

We are very proud of their kind hearts and warm welcome they showed us during our stay. We can't find the best way to express our gratitude other than saying thank you!!!!. As we have visited the Rwanda program, we wish to do the same when you visit the country of a thousand hills and opportunities: Rwanda.

In Addition, My gratitudes goes to our sponsors specifically, Mitsubishi foundation MUFG,NPO TER and sojitz, we so glad you sponsored our conference.We immensely appreciate your sponsorship, and as we keep and extend out collaboration and partnership it is also a bi- responsibility to look forward or serve the world and embrace this growing technology without compromising the environment and or our lovely community.

2 weeks of experience in Rwanda has been a learn and an unlearn journey, we saw what many could think was possible, as we were concerned with the development and its impacts on the environment and community. Japan, through a long journey of trial and error, has hit the great point where development does not mean a compromise in the environment. However, there is still a huge gap between development and community. Especially the young generation, they seem to not care what is going on within their community compared to the young generation in Rwanda.

I believe our cooperation will contribute to the development of both countries and contribute to the solution of both countries' challenges. In Rwanda, we look forward to the development of the country from low income country to middle income country by 2035 and High income

country by 2050, with this in mind, the development should not be achieved on the expense of environmental resources and cultural destruction as many developed countries encounter.

Japan also has an unhappy community, a great factor to HIKIKOMORI. The Rwandan community is happier, I believe Japan can learn from Rwanda to solve some social challenges. We believe that JRYC will continue to open both country's citizens to visit, live, invest and or work from both countries.

Japan Rwanda Youth Cooperation will keep the both countries' youth together and closely connected, through its Joint project: GREEN ENVIRONMENT? Study Tour, and Physical and online conferences that keep us united and serve to our mutual understanding.

As JRYC contributes to members' personal development, I believe it will keep members growing in their career as well. Conferences are a good time for members from both sides to learn and visit new places that we have not yet visited before. It is a precious moment that we cherish and I believe everyone learns and gets experiences from different visits we had like DAIKIN, MITSUBISHI, COFFEE COMPANY MICAFETO, National Museum of Science and Innovation among others. I believe this experience will contribute to creativity and serve a symbol for what is possible in today's world.

後援者挨拶(小峯先生)

2023年夏、日本ルワンダ学生会議は、5年ぶりにルワンダの大学生を日本に招致し、交流活動を行うことができました。人の入れ替わりが激しい学生団体であるにもかかわらず、そしてコロナ禍で海外渡航などの交流活動への制約があったにもかかわらず、メンバーたちが活動への情熱を失うことなく、また運営上のノウハウを途切れさせることなく、今回の事業を形にできたことに、まず敬意を表したいと思います。

今回の全体テーマは、「発展の弊害を再考して、両国の今後の発展のあり方を考える」というものでした。1994年のジェノサイドの発生とその終結の後、2008年ごろからルワンダでは「アフリカの奇跡」と呼ばれる経済成長が続いています。日本からの訪問者も、私自身がジェノサイドの直後に現地で支援活動を始めた時では考えられないほど増えました。それらの人々の多くが、「アフリカとは思えないくらい」の発展した首都のキガリの様子を驚きとともにSNSなどで発信しています。

一方で、ルワンダにおいても、経済発展の影の部分としての貧富の格差が拡大しています。首都のキガリを離れて、地方の農村に入れば、いまだに経済的な理由で就学できない子どもたちや、栄養状態の悪い子どもたちなどを目にするがあります。

日本もまた、ルワンダとは違う意味で「格差社会」と形容されることがあります。アフリカの人たちにとっては、まばゆいばかりの夢のような豊かな国である日本で、路上生活者がいたり、1年間で3万人も自殺者が出ていることは驚きなのです。

そういう意味で、日本とルワンダの学生たちの活動は、「先進国」と「発展途上国」との交流ではなく、類似の社会問題を抱える両国の若者が、未来に向けて意見を交換し合う貴重な場となっていると考えます。

小峯茂嗣

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター ボランティア・コーディネーター

立教大学異文化コミュニケーション学部 助教

団体概要・沿革

団体概要

日本ルワンダ学生会議 (通称：JRYC、英語表記：Japan-Rwanda Youth Cooperation)

設立:2008年5月

代表 長澤里桜(上智大学2年)

副代表 石田真輝(東北大学2年)

団体の沿革

2005年に早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターが「平和学習」をテーマとしたルワンダ渡航プログラムを主催したのが、学生交流の始まりです。当初は、ボランティアセンターが企画・主催していましたが、2008年からは学生が主体となって学生会議活動の運営を行うようになりました。以来、開催場所を日本・ルワンダと交互に変えながら、今年まで通算20回の本会議を実施してきました。次回は、2024年8月に日本人学生がルワンダに渡航し、ルワンダ現地にて第21回本会議を実施する予定です。

活動理念

私たちは「相互理解を深めること」を活動理念に掲げています。

ルワンダの表面的な状況を知ることはできても、その実態やそこに暮らす人々について知ることは困難です。また、現地で起こる社会問題に対して、先進国から一方的な支援の形がとられているという現状もあります。

その中で私たちは、実際に現地で暮らすルワンダ人学生と直接交流することによって相互理解を深めること、さらに信頼関係を構築することを目的に活動を行っています。

過去に経済成長を果たし国際的な影響力を持ちつつも、現在は多くの社会問題に直面しつつある日本と、民族分断やジェノサイドを経て近年急速な成長を遂げるルワンダ。団体としての活動は小規模ではありますが、立場の違う両国の学生が意見を交換し、互いに理解し合うという経験を通じて自国の未来を再考すること、さらには世界平和へ貢献することができると考えています。

主な活動内容

・本会議

年に一度、日本人学生のルワンダ渡航事業と、ルワンダ人の日本招致事業を交互に実施しています。本会議中には、プレゼン発表やフィールドワーク、文化交流イベントを通じて相互理解の促進に努めます。

- ・定例ミーティング
週一回ほどオンライン上でミーティングを開催し、本会議などの活動の準備や進捗状況の確認を行います。
- ・勉強会
月に一度、オンラインで実施しています。メンバーが交代で、ルワンダに関する発表をおこなっています。
- ・活動報告書の作成と報告会の開催
- ・講演会や出張授業、外部イベントへの参加
高校や大学での出張授業を行なっています。また、SNS を活用してアフリカやルワンダに関する理解を促進しています。

ルワンダ基本情報



首都:キガリ
人口:約 1377 万人(2022)
面積:2.63 万km²
言語:ルワンダ語、英語、フランス語、スワヒリ語
宗教:キリスト教(カトリック、プロテスタント)、イスラーム
民族:フツ、ツチ、トゥワ

地理

ルワンダはアフリカ大陸中央部に位置する内陸国で、南北東西をそれぞれブルンジ、ウガンダ、タンザニア、コンゴ民主共和国と接している。面積は四国の 1.5 倍ほどの小さな国だが、国土のほぼ全域が丘陵地なので、「千の丘の国」とも呼ばれる。また、アフリカ大地溝帯の西リフト・バレーの上に位置しているため、地殻変動によって生じたキブ湖やルジジ川渓谷、ヴィルンガ山地の火山帯を有している。気候は全土が温帯に属している。標高 1500m 程度のキブ湖岸地域の年間平均気温は 22.8℃である。赤道に近いため四季はないが、3 月中旬から 5 月中旬に大雨季、5 月中旬から 10 月中旬に大乾季、10 月中旬から 12 月中旬に小雨季、12 月中旬から 3 月中旬に小乾季がある。

略史

| 年 | 出来事 |
|-------------|----------------------------------|
| 15 世紀頃 | ルワンダ王国成立 |
| 1890 年 | ドイツ保護領になる |
| 1922 年 | 第一次世界大戦の結果、ベルギーの信託統治領となる |
| 1961 年 | 王政廃止、共和制樹立 |
| 1962 年 | ベルギーから独立 |
| 1973 年 | 軍事クーデター、ハビャリマナ少佐が大統領就任 |
| 1990 年 10 月 | ルワンダ内戦勃発 |
| 1994 年 4 月 | 内戦中に大虐殺(ジェノサイド)発生、約 80 万人が亡くなる |
| 1994 年 7 月 | ルワンダ愛国戦線(RPF)が全土を完全制圧、内戦終結 |
| 2000 年 4 月 | カガメが大統領に就任(3 度の大統領選挙に勝利し、現在も大統領) |
| 2007 年 7 月 | 東アフリカ共同体(EAC)に加盟 |

政治

政体:共和制

元首:ポール・カガメ大統領

内政:宗主国ベルギーの分割統治により、1962 年の独立以前からフツ人とツチ人の中で確執が生じていた。独立後は多数派のフツ人が政権を掌握し、ツチ人を迫害する事件が度々発生するようになった。90 年にツチ人主体の反政府軍が反乱を起こし内戦が勃発した。特に、94 年 4 月からはツチ人に対する組織的な大虐殺が起き、終戦までの 3 ヶ月に 80~100 万人が犠牲になったと言われている。同年 7 月に内戦が終結し、新政権が発足。出身部族を示す身分証明書の廃止、遺産相続制度の改革、国民和解委員会の設置など、国民融和・和解のための努力をこれまで行ってきた。

03 年から大統領選挙で 3 回連続当選しているカガメ大統領は汚職対策や女性の活躍推進に力を入れており、女性が国会議員に占める割合は 61.3%となっている。経済政策の観点からは、農業や産業、教育など各分野で生産性を高める情報通信技術 (ICT) を成長戦略の最と位置付けている。

日本との関係

現職のカガメ大統領は過去 6 度来日し、首脳会談が開催されるなど、両国関係は非常に良好である。インフラ面での中国投資が著しいルワンダではあるが、カガメ大統領は人材育成を重視する日本の支援も高く評価している。独立行政法人国際協力機構(JICA)の事務所も置かれ、そこを通じた支援も積極的に行われている。

経済

主要産業:農業

GDP:約 110 億ドル(2021)

経済成長率:10.9%(2021)

内戦、虐殺からの復興はすでに終わっているが、経済規模や産業の成熟度の点では後進国の域を脱していない。政府は内陸国という地理的に不利な条件を埋め合わせるべく、ICT 立国をスローガンに掲げており。自国の産業育成と外資の取り込みに注力しているが、未だ発展途上にあると言える。農業と公務員以外の仕事がなく、大学生などの超エリート層であっても就職難に直面するという現状がある。日本企業は現在 20 社程度が進出しているが、個人営業の小規模ビジネスがほとんどで大企業はない。ただ、トヨタ製の中古車は数多く輸入されており、同国の自動車シェアの 8 割以上を日本車が占めていると推定される。

(以上、外務省ホームページより一部引用、加筆)

2章 第20回本会議 概要

スケジュール

| | 午前 | 午後 |
|------|---------------------------------------|---------------------|
| 8/6 | 16:25 カノンベ空港発 -19:50 ボレ国際空港着 22:35 同発 | |
| 8/7 | | -20:05 成田国際空港着 |
| 8/8 | ゲストハウス・ホームステイ先へ移動 | オープニングセッション歓迎会 |
| 8/9 | 埼玉県立浦和商業高校太鼓部見学 | |
| 8/10 | 新幹線移動:東京駅→新大阪駅 | ダイキン工業訪問 |
| 8/11 | 京都大学見学 京都散策、寺院巡り | 新幹線移動:京都駅→東京駅 |
| 8/12 | 休息 | 神田明神の納涼祭り参加 |
| 8/13 | 文化交流会(両国の料理作り) @アイマール十条 | 学生会議 @オリンピックセンター |
| 8/14 | 早稲田大学見学 | 東京散策 |
| 8/15 | Eric・Claver 病院訪問 | JICA 東京訪問 |
| 8/16 | 武蔵野クリーンセンター訪問 | |
| 8/17 | ルワンダ大使館訪問 | 三菱 UFJ 国際財団訪問 |
| 8/18 | 株式会社ミカフェート訪問 | |
| 8/19 | 休み | |
| 8/20 | | 本会議(オンライン) |

| | | |
|------|--|---------------|
| 8/21 | | 21:15 成田国際空港発 |
| 8/22 | -07:20 ボレ国際空港着 11:30 同発 -13:00 カンノベ空港着 | |

参加者名簿

日本側メンバー

| 参加者名(日本側) | 所属学校、専攻等 | 役職 |
|-----------|---------------------------|-----|
| 長澤里桜 | 上智大学総合グローバル学部 2年 | 代表 |
| 石田真輝 | 東北大学工学部 2年 | 副代表 |
| 小日向麻優 | 東北大学工学部 4年 | 会計 |
| 山崎優菜 | 京都外国語大学国際貢献学部 4年 | 企画 |
| 内凜太郎 | 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 1年 | 広報 |
| 奥山千笑 | 東京女子大学現代教養学部 3年 | 広報 |
| 吉野匠人 | 東京大学大学院「人間の安全保障」プログラム | 企画 |
| 内田柚希 | 東京大学教養学部前期課程 1年 | |
| 松岡由美子 | 東京外国語大学修士課程 2年 | |
| 須田将司 | 東京理科大学工学部卒 | |
| 蓮沼愛里 | 明治大学法学部 1年 | |
| モー・チャーン | イベントメンバー | |
| 佐野遥紀 | イベントメンバー | |

ルワンダ側メンバー

| 参加者名(ルワンダ側) | 所属学校、専攻等 | 役職 |
|-------------------------------|--|-----|
| Pierre Claver Rusingizandekwe | University of Rwanda Bachelor of Pharmacy | 代表 |
| Jean Eric Niyitanga | University of Rwanda Bachelor of Medicine and Surgery | 前代表 |
| Alia Teto | University of Rwanda Bachelor of Business Information Technology | 書記 |

本会議 概要

本会議 概要

About Plenary Session

実施日

2023年①8月13日、②8月20日

開催場所

①国立オリンピック記念青少年総合センター、②オンライン

活動内容

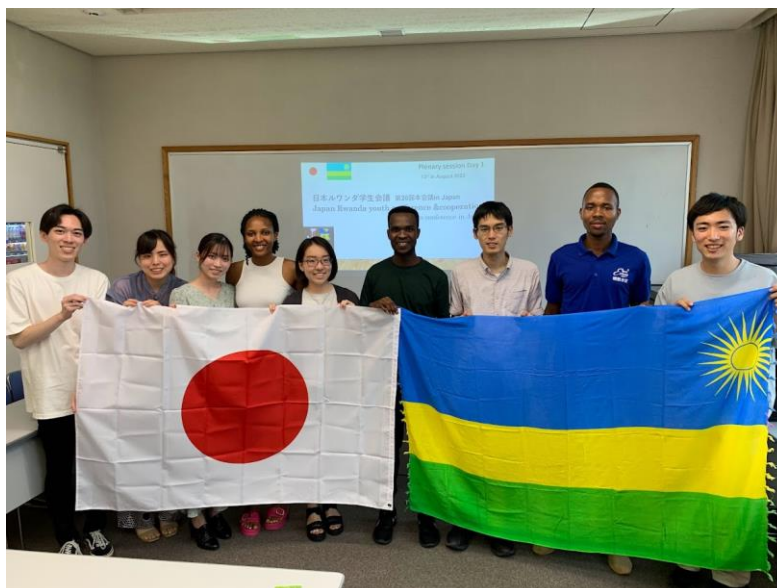
日本・ルワンダ両国の学生が、それぞれ全体テーマ(後述)の中の3つの観点から1つ選び、両国における現状の理解を深めるプレゼンテーションを行った。全員のプレゼンテーション終了後には、各々の発表に対する質問や、全体テーマや各トピックに関連したディスカッションセッションを開催した。

活動目的

今回の本会議のテーマに対し、両国の学生が対等に意見交換をすることで、自分たちなりの考えを見出すこと。また、背景が違う学生同士の考えを聞くことで、テーマや互いの国についての理解を深めること。

活動成果

1. 互いの国における現状や未来に対する深い理解と学び
2. 異なるバックグラウンドを持つ学生同士の、異なる価値観や考え方との出会い
3. 日本およびルワンダの将来について、日本側・ルワンダ側双方の真剣な議論



全体テーマ

発展の弊害を再考して、両国の今後の発展のありかたを考える

長い歴史の中で、我々人間は地球の恩恵を大いに受けてきたが、今ある資源を惜しみなく使うことを前提とした経済・社会の発展は、ついに限界を迎えようとしている。そのため、発展途上国のみならず先進国も一丸となり、持続可能な開発の実現に向けて世界全体で取り組むべき国際目標として、17の目標、169のターゲット、232の指標から構成されるSDGs (Sustainable Development Goals/ 持続可能な開発目標)が、2015年9月に開催された国連サミットにおいて全会一致で採択された。日本でも個人、学校、企業、政府など、様々な単位で持続可能な開発の実現に向けての取り組みが進んでおり、その認知度も向上傾向にある。一方で、最近では「脱開発」といった概念も注目を集めてきている。日本や欧米諸国などは近年、発展しきった社会であると言われることがある。こうした国では、物質的な豊かさの際限のない追及に疑問の声が上がることもしばしばある。脱開発は、経済成長イコール皆が追求すべきものという従来の開発パラダイムを部分的に否定し、幸福そのものの本質からスタートしようというものである。従来の発展の仕方とは少し異なる点があるが、この脱開発という概念も視野に入れながら今後の発展について検討したい。

そのためにはどのような観点から発展というものを考え直す必要があるだろうか。我々は、①環境問題、②コミュニティ・家族の問題、③伝統文化と発展の関係性を考察することが必要だと考える。さらに、これらは一つの国のスケールで捉えることが困難であり、各国の協力が不可欠だ。

我々はこの14日間を通し、発展にはどのような弊害が生じてきたか、そして今後両国がどのように発展していくことが必要なのか、①②③の3点を中心に考えていく。

具体的には、日本の各所を訪問し日本で学べる知識を共に学習する。その上で、本会議等で各々の持っている知見や視点を共有し、意見交換によって理解を深める。

①②③についての詳細を以下に記す。

①環境問題と発展

現在先進国と呼ばれる国々の発展は、環境問題と隣り合わせに成立してきた。日本も例外ではなく、高度経済成長期には硫黄酸化物による大気汚染や産業排水の自然環境への放出などによる環境汚染が生じた。いうまでもなく、これらの環境へのダメージは、国内問題に留まらず、国際的な問題にも繋がっている。こうした文脈から、環境保全と発展を両立させる必要性が認識され、「持続可能な開発」が提唱された。しかし、これには様々な意見がある。そのひとつが、先進国は環境への配慮なく発展したのであるから、現在の発展途上国も同様に発展し、環境問題への責任は先進国のみがとるべき、または先進国がより負担をするべきであるといったものである。一方、地球全体の課題であるからいずれの国も平等に環境保護への取り組みを行うべきであるという考えもある。

いわゆる先進国である日本の学生と発展途上国であるルワンダの学生がこのトピックについて真摯に向き合い、環境問題やその対策に対する考えを共有することには大きな意義がある。意見交換や関連する施設の訪問を通して、平等な対策とは何か、持続可能な発展をするためには両国そして世界の国々はこういった行動をとるべきなのかを検討する。

○関連した予定訪問先:ダイキン工業、武蔵野クリーンセンター

②発展とコミュニティ・家族の問題

第二に発展における弊害を家族やコミュニティの面から考えたい。

まず、現在の日本における家族をめぐる状況としては、2点指摘できる。第一に、経済成長に伴う産業構造の変化により都市に住む人々が増加し、故郷を離れ、「核家族」が増加していることである。第二に、この産業構造の変化に加え、グローバル化によるジェンダー平等の圧力が一層強まり、女子の社会進出が推奨され、男性の育児参加が奨励されてきていること。この、核家族の中で男女ともに働くという状況は、人権保障といった面では「良い」方向に成長しているのかもしれない。しかしここで、核家族化がもたらす負の側面にも着目したい。核家族化が進行すれば、「繋がり」が希薄化し、孤独・格差といった社会的課題をも生み出している。また女性の社会進出が「主婦」達の存在意義を軽視する見方を促進しているのではないかとといった議論も今日展開されている。

そして、都市に住む人々は一般的にコミュニティ(自治会など)の活動を軽視する傾向にある。家族間の繋がりに加え、経済発展によって地域における人々の繋がりも希薄化しているのである。

ルワンダでは、1990年代の紛争と虐殺が寡婦や離婚女性、孤児を膨大に生み出したとされており、また地域の中でも「加害者」「被害者」といった二分化された構造が存在する。その後、コミュニティを通じた司法制度であるガチャチャや、毎月行うコミュニティ作業であるウムガンダを通して、コミュニティの連帯強化に尽力してきた国家である。しかし、ルワンダもジェノサイド以降の復興過程において、「アフリカの奇跡」と呼ばれるまで急激な経済成長を遂げた。その過程の中で、家族の変容や脆弱な人々への対応はどの様になっているだろうか。ルワンダが経済発展に伴う家族・コミュニティの変化にどう向き合っているのかを検討したい。

また、日本だけではなく、先進国の多くでは社会的排除を伴う「相対的貧困」といった新しい経済貧困や、少子高齢化に伴う福祉問題などが存在する。これらの問題はいうまでもなく、家族やコミュニティの文脈から議論されるべきテーマである。これら課題の認識を共有しあい、両国の課題を話し合いたい。

③発展と伝統文化

3点目として、発展と伝統文化を「脱開発」の文脈から考える。

日本や欧米諸国などは近年、発展しきった社会であると言われることがある。また、国民感覚においても物質的な豊かさの際限のない追及に疑問を呈することは多い。学生会議のメンバーは、ルワンダやアフリカと日本を頻繁に比較する。そこで、人間らしく、大いに活気のあるルワンダを見ると「より良い生活とは何だろうか」と自問自答する機会が多い。

このような問題意識は世界中で起こり、そこで近年注目されている概念が「脱開発」である。脱開発は、これまでの近代資本主義の集大成を否定するものではない。経済成長イコール皆が追求すべきものという従来の開発パラダイムを部分的に否定し、幸福そのものの本質からスタートしようというものである。金銭で入手できるものよりも、例えば芸術に触れる方が幸せだ、という考え方もあるだろう。幸福にはさまざまな考え方や在り方がある。そして、脱開発の文脈でしばしば参照されるのが伝統文化である。

アフリカの伝統的な暮らし方や日本の農村部の人々の暮らしの知恵、ラテンアメリカの先住民たちの幸福観など、伝統文化にはそれぞれその知識が蓄積されている。そのそれぞれの知識体系には、より

良く暮らす(つまり well-being)ための知恵が眠っている。開発のアンチテーゼ的な幸福を追求する上で、その知恵はたいへん価値のあるものである。

このような背景から、脱開発を開発の選択肢の一つとして視野にいれ、新しい幸福とは何なのか、そのために活用できる伝統文化はあるのか、発展のその先をルワンダ人と日本人で学びたい。

○関連した予定訪問先: 神田明神の納涼祭、京都散策・寺院巡り

Reflecting the problems caused by developments and find future plan for each country, Rwanda and Japan

The countries, what we call “developed countries”, have made progress at the expense of resources without any limit. However, that way cannot be continued anymore. To tackle this problem, SDGs have been suggested for every country in the world, not only developed countries. In Japan, schools, companies, the govt and even one person work hard for

However, the developments have caused a lot of problems for the environment, community and family, and traditional culture.

First, in the past some countries have developed without taking any environmental protection and that ended up causing air pollution, deforestation, global warming and so on. A lot of discussions are going on,”Only developed countries should take the expense of protections because these have been caused by them” or “All the countries should do it because it’s a problem for the earth.” Then, Rwandan members and Japanese members have discussions and reach a new solution.

Secondly, economical developments have made our lives better. Household machines do almost everything instead of us and we have time to spare for pastime. Nevertheless, material abundance has pulled unit bonds of people apart. In Japan, people seldom join community events so they do not know who lives next to them. More and more families spend less time together. On the other hand in Rwanda, there is a community work called “Umuganda” which tighs community connections. We find out that as the country develops,how family and community reacts to the changes.

Lastly, there is a concept “post development theory”, which suggests that Japan and western countries’ society has finished development. People tend to feel pursuing unlimited material abundance is not well-being. What is a “good life”? Then, traditional lifestyle and culture can be reference material. Each traditional culture, such as the African lifestyle, and Japanese lifestyle in farming villages has knowledge to live with happiness. Taking post development theory into consideration, we discover what is happiness for our lives, what kind of traditional culture can be applied for that, and the future vision of coexistence of traditional culture and development.

プレゼンテーションの要旨

①8/13 実施

I Jean Eric Niyitanga, Rwanda

Title: Development and environment issues in Rwanda

Aligned with the general theme of the plenary session “Reflecting on the problems caused by developments and find future plans for each country, Rwanda and Japan”, Eric discussed Rwanda’s geography, development, and environmental problems related to development. Rwanda is a landlocked country in East central Africa 75 miles south of the equator. She is known as “The Land of a Thousand Hills” due to high altitudes ranging 950m to 4500m above the sea level with temperature 21 to 27 ° C and 4 seasons in the year. Rwanda has 5 volcanoes, 23 lakes and numerous rivers, some forming the source of the river Nile. Rwanda has experienced exponential economic and infrastructure development after 1994 Genocide against Tutsi. Gross Domestic Product (GDP) has risen from \$752 million in 1994 to \$9.5 billion in 2018. The main economic activity in Rwanda is agriculture contributing 35% to the national GDP, employing about 70% of the population. Furthermore, Access to facilities has increased Electricity (61%), Water (87.4%), Internet users: 30% (2023) from 2.3% (in 2022) and transport services by buses and motorbikes.

There is a catch! Development has led to different environmental problems to be addressed. Problems highlighted in the presentation were: land scarcity, soil degradation and soil erosion deforestation, climate change, loss of biodiversity, water pollution and access, urban pollution and natural resources pressures, generation of hazardous and solid waste, and natural resource depletion. For instance, as of 2023, there are 400 inhabitants per km² overall and more than 520 inhabitants per km² on agricultural lands with many other activities putting pressure on the environment.

The presentation concluded with Rwanda’s vision 2050 of sustainable development aligned with SDGs. It focuses on economic growth and prosperity, and high quality and standards of life for Rwandans with 5 pillars: 1.human development, 2.competitiveness and integration 3. agriculture for wealth creation; 4. urbanization and agglomeration; and 5. accountable and capable state institutions.

II 石田真輝

Title: Traditional Cultures in Japan ~In terms of traditional crafts and current challenges~

今回の本会議のテーマである「発展の弊害を再考した両国の未来」を考察する為に伝統文化という観点から、伝統工芸品を実際に持参して現状と近年の課題を提起した。私が実際に制作所を訪ね、山形県米沢市の「おたかぼっぼ」と宮城県仙台市の「松川だるま」の二つに関して伺ったお話をもとに紹介した。伝統工芸品は各地域で長年用いられる固有の材料とその繊細な伝統的手法で特徴づけられる。近年の問題点として、制作者の方々の高齢化に伴う後継者不足からその伝承が難しくなっている。その為の施策として中学生の修学旅行での絵付け体験の開催や芸能人によるテレビ番組での取材などで認知度を向上させ、JETROによる伝統工芸品の海外販売の支援で裾野を広げるなど様々な取り組みをしている。製作者としては伝統の保全と新しい時代の需要への対応との両立が難しいそうだ。私は自身の経験から教育によって伝統工芸品に対して興味を持つ子供が増えることが今後を考えて重要だと考えた。

III Claver

Title: Rwanda social community problems

My presentation focused on the internet results that tries to answer Rwanda's social community problems "the country of thousands of hills and Billions of opportunities".

Responses like:

Political Repression, Freedom of Expression, Repression Across Borders, Sexual Orientation and Gender Identity, Covid-19, International Justice, Ethnic Tensions and Reconciliation were not true, what I termed as a Big no. However, I exhaustively discussed a pressing community challenges in Rwanda like school dropout and early pregnancy as a burden for youth, and indicated how Rwandan government addressed the challenges: increasing the use of punishment, establishing laws and regulation, institutions that support those girls like Isange, one stop center and many more,

Clean water, electricity coverage to all people by 2024 in the NST1 programs established by Rwanda in 2017 were clearly explained.

You will or probably heard, People saying: Rwanda is Singapore of Africa and/or Wakanda of Africa.

The only question you can ask now is how Rwanda achieved all in such a period of time?

②8/20 実施

I 長澤里桜

本会議後半では、「The Vision for Rwanda and Japan、The future we want」という全体テーマのもと、ディスカッションを行った。前半では、日本とルワンダにおける「発展の実際」をキーワードにディスカッションを行い、両国で現状と課題が異なることを学んだ。そこで後半では、私たちが今後求める両国の未来のかたちとその実現のための課題を主要テーマとして扱った。

私個人のテーマは「日本とルワンダの協力の未来」であり、①日本とルワンダの相互理解を促進するにあたり必要なこと、②ルワンダと日本が「発展」を実現するにあたりその担い手となる人々はどのような協力を必要とするのかという以上の二点を中心に議論を行った。

前者について、ルワンダ大使館を訪問したことを背景に、国と国が接続する大局的な視点から相互理解について考える機会を設けたが、その推進には弊団体を構成する私たち学生のような1人1人の「youth」が重要なアクターとなるのではないかという考察をした。日本とルワンダにおいて、人々が相互に「互いに学び、互いを知る」という思いを通して活動・交流をする拠点を増やすことを提言した。後者について、「発展」は他国・他地域での成功を単に輸入するのではなく、それまでの工夫や試行錯誤といった地域に在来する価値観のもと解釈されたうえで目指されるものであり、発展のプロセスは一樣ではないことを述べた。すなわち、一方がもう一方に学ぶのではなく、両国が学び合うという視点が必要なのである。そこで以上に述べたような人的交流の促進は「相互の発展」と軌を一にするものであり、社会にインパクトを与え、可能性が大きく開く動きであると考えた。

II Alia

WOMEN EMPOWERMENT IN RWANDA

Women empowerment in Rwanda showcases the remarkable progress and initiatives in the country to promote gender equality. Rwanda has emerged as a global leader in this regard. The presentation highlighted the significant increase in women's political representation, with Rwanda having the highest percentage of women in parliament worldwide. It also emphasizes economic empowerment efforts, including support for women entrepreneurs and improved creativity and innovation. Additionally, having access to education increased the labor force of the country which is playing a vital role in the development of the country. Overall, the Rwandan case serves as an inspiring example of a nation committed to women's empowerment, demonstrating the transformative impact of legislative reforms, economic initiatives, and improvements in education and healthcare on gender equality.

III 吉野匠人

次のパートでは、これまでの議論で登場したコンセプトと本会議のテーマである「開発」との関係性を再定義しようというテーマで参加型のプレゼンを行った。

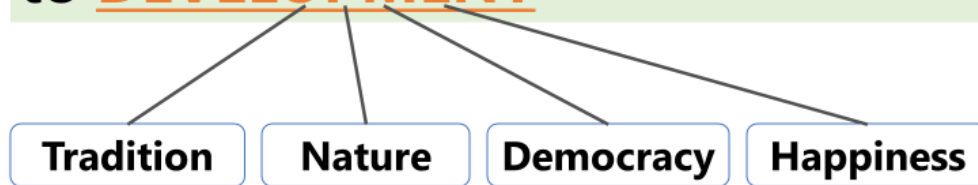
ルワンダサイド、日本サイドのプレゼンテーションや本会議中の議論から、参加者は「開発」の文脈で「伝統」「自然」「民主主義」「幸福」を結び付けていた。「開発」は広い概念であり、それに関してイメージする内容は各人によって異なる。そこで、そのイメージを共有することで「開発」の多面的・批判的な理解を促した。

具体的な内容としては、開発が進展すれば伝統は失われるというトレードオフの関係があるのか、開発のための自然破壊は正当化されるのか、途上国の開発による自然破壊に先進国はどう向き合うべきか、開発における民主主義の保障、開発は幸福をもたらすか、などであった。

質疑応答も盛んに行われ、本会議を締めるに相応しいパートとなった。

Question:

How do you **RELATE** the concepts we have discussed below **to DEVELOPMENT**



ディスカッション総括

8/20 実施(Eric)

Plenary session I **20/08/2023** Tokyo, Japan

Theme: Reflecting on the problems caused by developments and find future for each country, Rwanda, and Japan”

Moderator: Jean Eric Niyitanga

Panelist: Alia Teto, Rwanda, Rio Nagasawa, Japan, Takuto Yoshino, Japan

Time: 16:30–18:50 Platform: Zoom

The purpose of the second session was to further explore the theme of the conference in different aspects and discuss the future of the organization Japan Rwanda youth cooperation.

During this session the conference’s theme was explored in 3 aspects: Future for Rwanda Japan cooperation, Women empowerment in Rwanda’s development, and the relationship of development and nature, traditions, democracy, and happiness.

Rio: The future of Japan–Rwanda Cooperation

Development regards the brighter future for everyone. The future of Rwanda and Japan cooperation largely depends on sharing of the future goals among the youth. Young people should come together and support each other in their respective aspirations. And for both countries to keep developing, they should invest in” youth power” to develop human resources for now and for the future.

Alia: Gender equality and Women empowerment in development of Rwanda

Development is the improvement in different sectors and improving the quality of life. One of the factors for the development of Rwanda is Women empowerment; it increased productivity as the labor increased and innovation in different industries as women were included. To reach the level of Gender equality, there is a need to engage men and develop understanding and open inclusive spaces in employment and mentorship

Takuto: Development in relations to tradition, nature, democracy, and happiness

Development is all about changes that make life more convenient and better. While many developments attempt to get rid of the traditions, it is not the best way to go; it should not be a tradeoff, it should be an add on. Regarding nature, development can’t have detrimental effects on nature and natural resources. This might backfire in the long run as the plan becomes unlivable through climate change and disturbed ecosystems. We should seek development without destroying nature. Development and democracy should be balanced. Democratic way of adopting development can be very slow. However, dictated developments might not be in the best interest of the people making consensus a necessity. Development doesn’t necessarily make people happier. This is because convenient life brought up by technological advance can be so addictive and reduce human interactions. As people interact less, the less happier they are more likely to be.

The panelists concluded with the contribution of JRYC in the development of both countries (Rwanda and Japan). They highlighted: commitment to contribute, create a platform for learning and sharing, advocacy in different sectors, innovation and technology exchange, community engagement and encouraging one another.

The future of JRYC was discussed: 2024 conference in Rwanda, potential joint project, engaging more youth and strengthening members' engagement.

3章 各活動報告

太鼓部見学

文化交流の促進をするべく、日本の高校生とルワンダ人学生が交流をする機会を設けました。この度、パートナー校として埼玉県立浦和商业高校様にご協力をいただき、太鼓部の活動を見学する機会をいただきました。太鼓部の皆様をはじめ、先生方や保護者の方の温かい歓迎を受けて、おもてなしの心を感じました。

ルワンダメンバーの3人は、1つ1つの演目の迫力に感銘を受け、また日本の高校生と心を通わせることができたことを大変喜んでいました。伝統芸能という日本の文化を通してお互いへの理解を深めることができた貴重な交流の機会となりました。高校の皆さんからは学生たちにとって海外に興味関心を抱く機会となったとのことのお言葉を頂きました。



ダイキン工業

空調機器でグローバルシェア1位を誇り、アフリカへの事業展開も行っているダイキン工業株式会社様の技術拠点であるテクノロジーイノベーションセンター(TIC)を企業訪問させていただきました。TICでは、空調機器やダイキン工業の歴史を展示した「啓発館」や、最新技術の展示を見学させていただいたのち、グローバル戦略本部の社員の方から現在のアフリカ展開の状況について説明をいただきました。

ルワンダ人メンバーの3人が展示や説明から非常に多くのことを学ばせていただいたことはもちろん、日本人メンバーにとっても日本企業とアフリカとのかかわり、あるいはそれぞれのキャリアを考えるうえで大変貴重な機会となりました。ルワンダ人メンバーも「DAIKIN」という名前を知っているほどアフリカでも存在感の高まっているダイキン工業の社員の方々との交流を通し、ルワンダ人メンバーがビジネスパーソンとして日本とのつながりを維持し続けてくれるような未来をつい想像してしまいました。



京都散策



京都大学の大学院に所属しているルワンダ人留学生2名と共に、京都の寺社を巡りました。伏見稲荷大社と東寺を参拝しました。Eric、Claver、Alia は日本の伝統的な建造物や仏像などを興味深く見ている、日本文化や京都ならではの風景を楽しんでいました。特に Eric は東寺にて、厳かな雰囲気を感じ、日本の静寂を楽しみ精神を統一して真理を追求する「禅」の一片を感じていました。また Claver は、日本の伝統文化や古い建築物が現代にも大切に残され、多くの人から愛されていることに非常に感銘を受け、自国でも日本のように伝統的な文化や建造物を大切に残していきたいと語っていました。Alia も古くから紡がれている京都の文化を五感で感じ、感銘を受けている様子でした。この3名にとって、京都という土地を訪れ日本の伝統的な文化や建造物を五感で感じた体験は、かけがえのないものになっただろうと強く感じています。

納涼祭り

神田明神で開催されている納涼祭りに参加しました。このお祭りはお盆の時期に東京で賑やかなことをする目的で 2016 年に初めて開催され、当日は千代田区民踊連盟の方による「東京音頭」、「炭坑節」などの盆踊りが行われました。その中でも「神田明神音頭」については、皆で振り付けを真似て櫓の周囲を回って踊る素敵な機会となりました。ルワンダ側としても、和太鼓の演奏や日本を代表する踊りとも言える盆踊りに興味津々という様子で、その雰囲気が「とても素晴らしい」と語っていました。以下の写真は日本からルワンダ側への贈り物としてあげた甚兵衛と浴衣を当日着替えて神田明神の前で撮影した様子です。お祭りでは人が多く迷子になる瞬間もありましたが、屋台では飲み物を買って、写真撮影に興じるなど、雰囲気を存分に楽しんで頂けたようでした。



文化交流会

レンタルキッチンを利用して、両国の料理を通じた文化交流会を実施しました。

日本サイドは手巻き寿司を振る舞いました。食文化の違いなどから手巻き寿司の具材を、釜揚げしらすや加工された魚介類にすることで、日本・ルワンダ両サイドが楽しめる食事を作りました。ルワンダの学生らにとっては、海苔を手に取りそこに具材を乗せて、巻いて食べるのが新鮮であったようです。

ルワンダサイドからは、すりおろしたニンジンと米を炊き込んだ料理、じゃがいもと玉ねぎを茹でた料理、ニンジンとインゲンをトマトソースと油で煮込んだ料理が振る舞われました。これらを一つのお皿に盛って合わせながら食べるのが、ルワンダの家庭の味であるとのことでした。以前の渡航事業参加メンバーからは、トマト味の煮込み料理が懐かしいという声も聞かれました。

食事をしながら、両国の料理の違いに関する所感を共有しあったり、ルワンダの伝統的な料理には日本で手に入りにくいようなヤマイモ等を使うのだということを教えてもらったりと互いの食文化への理解を深めることができました。さらに、互いの料理の準備を手伝う姿も見られ、文化への理解を深めるだけでなく、招致事業参加メンバーの絆を深める良い機会となりました。



早稲田大学見学

日本の大学、学生街の様子を見るという目的で、早稲田大学とその周辺に訪れました。早稲田大学は日本でも有数の学生数を誇る私立大学で、キャンパスもきれいなものが多いです。ルワンダサイドの参加者は、大隈重信像や大隈講堂で写真を取ったり、卒業生から学生生活の様子の説明を受けたりしました。

また、早稲田大学に訪問中は、ルワンダと日本の大学制度の比較についての議論にも花が咲きました。ルワンダの大学の中では、ルワンダ大学という国立大学の一人勝ちですが、他の途上国と比較して私立大学の発展も見られます。その点、日本に似ていると思いました。

早稲田大学の周辺には、学生に好まれる小規模の飲食店や商店が軒を連ねます。今回は、早稲田大学の学生に人気の油そば屋と、コーヒーの豆を輸入している店に訪れました。ルワンダにも学生街と言われる街、フイエがあります。ですが、まだまだ早稲田のような日本のそれと比べると賑わいに欠けます。そこで、起業に興味のある参加者は日本人メンバーとビジネスアイデアについての議論を交わしました。



JICA 本部

日本とルワンダの今後の発展について「開発や協力」の視点から学ぶために、国際協力事業を通して開発途上国の開発を担う JICA 本部(日本国際協力機構本部)、アフリカ部を訪問させていただきました。日本が行う対ルワンダ開発協力の具体的な開発協力事業内容や JICA 職員としての働き方について、お話を伺いました。具体的には、教育、農業、インフラ、テクノロジーの各分野においてどのような事業があるのか、そのプロジェクトの過程について伺いました。

訪問を通して、ルワンダ人学生にとっては自国に対する日本の協力について学んだ他、ルワンダの発展に対する考えを職員の方々と共有させていただく機会となりました。ルワンダに対する協力は日本の発展にも繋がっているという考えを共有し、本会議のテーマについて「開発」の視点から考えることができました。



クリーンセンター

東京都武蔵野市のゴミ処理施設である、武蔵野クリーンセンターを訪問しました。武蔵野クリーンセンターは、ごみ処理施設としては珍しく市街地の中に立地しており、またその外観はまるで美術館のようで、まさに「地域に開かれたゴミ処理施設」となっていました。

建物内部では、クリーンセンターの概要や武蔵野市のゴミ収集から処理までの流れについて職員の方から説明をいただきました。見学を通して特に驚いたのは、ゴミのにおいが一切せず、いわばごみ処理施設の概念を覆すような技術が建物に凝縮されていたことです。また処理の過程で排出された熱は発電に、灰はセメントへと活用することにより、環境に配慮した循環を達成していることにも非常に感銘を受けました。

ルワンダを含むアフリカでは、人口増加に伴うゴミ処理が大きな課題となっています。日本の中でも最先端の技術を誇る当施設の見学を通し、あらためて発展にともなう課題をどのように解決するかを考える機会となりました。



駐日ルワンダ大使館

日本とルワンダの二国間関係の発展や関係構築について伺うべく、駐日ルワンダ共和国大使館、及びルワムキョ駐日大使を表敬訪問をしました。日本人メンバーがプレゼンテーションを交えて弊団体の概要について紹介した後に、ルワンダ人メンバーがルワンダの概要について紹介をしました。両国が互いにどのような「発展」を目指すことができるのかということを中心に意見交換を行い、日本人メンバー、ルワンダ人メンバーともに多くのことを学ばせていただきました。

大使から二国間関係を促進するべく、より多くのメンバーを巻き込み、大学と連携をしていくことが重要であるとの提言をいただきました。それぞれのメンバーが大使に質問を投げかけ、和気あいあいとした雰囲気うちに終了しました。



三菱 UFJ 国際財団

今回の本会議開催にあたり、助成金を支給して下さった財団の一つが三菱 UFJ 国際財団様です。そのお礼と活動の報告を兼ねて、訪問させていただきました。弊団体の活動を大いに評価していただき、またルワンダ人メンバーの日本に対する感想にも興味を持ってくださいました。ルワンダ人メンバーが寿司を好んで食べることに驚いていたようです。貴重なお時間をいただけたこと、改めて感謝申し上げます。



ミカフェート



Alia の個人テーマである、ルワンダのコーヒービジネスについて知見を得るため、ルワンダ産コーヒーを取り扱っている株式会社ミカフェートを訪問しました。代表取締役社長である川島様から直接お話を伺いました。

貴重なお話の中で、ルワンダのコーヒー産業には大きく分けて三つの課題があることを学びました。一つ目の課題は、質の高いコーヒーを育てる知識がないことです。多くのルワンダのコーヒー農家が、質の高いコーヒーを育てるための土壌や環境の知識がないため、他国と比べて収穫量に対するコーヒー豆の比率が少なく質が高いコーヒーが作れないようです。また「スペシャルティコーヒー」に対する国際的な基準も理解しておらず、他国が最大でも約 10%と公表しているところ、ルワンダは約 50%と公表しています。そのため、ルワンダのコーヒーは「チャリティコーヒー」としてしかブランディングできないとの鋭い見解をいただきました。二つ目は、アフリカ他国と比べても輸送コストが高いことです。ルワンダには、コーヒー豆の質を落とさず安全にダルエスサラーム港まで送り届けてくれる輸送業者が少なく、輸送コストも他国と比べて高いそうです。また、輸送に関しての補償も曖昧で、何かトラブルが起きても全て輸送先の会社の責任となると伺いました。三つ目は、ルワンダのコーヒー豆は独特なポテトのような香りがすることです。そのため、多くのコーヒー卸売業者がルワンダコーヒーをあまり扱いたくないと考えるようです。しかし現在は JICA の協力のもと、ある虫が原因であることがわかり現在は改善されつつあります。

Alia はこのお話を伺い、ルワンダのコーヒー産業は世界的に見ても強みであるという仮説が覆され、自国のコーヒー産業に対し大きな課題感を得たようでした。真実を知るといことは過酷なことではありますが、ルワンダの未来を担う優秀な学生が真実を知りそれを自国へ持ち帰ることは非常に有意義なことであると感じました。

改めまして今回の活動にあたり、訪問を受け入れて下さった以上の企業・関係機関の皆様、貴重な機会をいただきましてありがとうございました。

4章 参加者所感

明治大学1年 蓮沼愛里

私が初めてルワンダ側のメンバーと会ったのは、ルワンダ大使館訪問の日でした。まず、スーツをビシッと決め颯爽と登場したルワンダ人メンバーに圧倒されました。しかし実際に話してみると、とてもフレンドリーに接してくれたため安心したのを覚えています。訪問先で熱心にメモを取ったり、質問をしたりする彼らの姿からは自分たちルワンダ、アフリカの将来を変えたいという強い思いが感じられました。

二日間という短い交流期間の中で、最もよく話したのは Claver でした。その時の私は、まだルワンダについての知識も浅く、ルワンダといわれて最初に思い浮かべるのはルワンダ大虐殺であったため、彼との最初の会話も「What do you think about the Rwandan genocide?」から始まりました。後から考えると非常にセンシティブな内容だったにもかかわらず、嫌な顔一つせず丁寧に答えてくれました。彼が、ルワンダはジェノサイドだけじゃないと繰り返し述べていたことが印象に残っています。

実際にルワンダ人と接することでたくさんの学び、刺激がありました。ルワンダという国に対する心理的なハードルがぐっと低くなったほか、本や映画で学んだ事柄に意味合いが出てきたように感じます。

突然の参加だったにもかかわらず、快く受け入れてくださったメンバーの方々には感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



本年度(2023年)はイベント側サイドのメンバーとして参加致しました。長年アフリカに関しては関心がありましたが、どういった観点を入力にしていかわかりませんでした。テキストベースや動画ではなく、とりあえず直接会って見ることにしました。ルワンダということで、まず一番先にルワンダ虐殺を真っ先に思い出しました。民族間対立や帝国主義による植民地政策、経済発展やインフラ開発、識字率や教育問題、政治的な不安定さなど多数の要因により、こういった虐殺が引き起こされることがよく理解しました。

本交流では3人のルワンダ人(男性×2(Erick 医療, Clever 薬剤師), 女性×1(Alia ビジネス))が来日して交流しました。ルワンダは植民地政策の影響によりコーヒーが主産業ですが、国際的な評価や競争力が十分でなく、また内陸国であるため、海洋運搬ができずに陸上輸送を他国で行い、そこから海洋運搬を行う必要があります。そのため地政学的にも国際市場にアクセスするだけでも、優位性を確保しづらいです。

そういった中で旧植民地国同士でモノカルチャー経済でコーヒー豆、砂糖、スパイスといった商品で国際的に競争していくのは、旧植民国にとってはある意味で悲劇的ですが、既存のモノカルチャー経済しかない中で職を得て生活していくためには、避けられない運命です。

また発展途上国でのコーヒー栽培の技術指導及び、輸入、日本国内で封印、販売するミカフィットでは、実際に栽培地に出向、現地でのコーヒー豆の品質の問題も明らかにしました。それらはコーヒー栽培の企画がバラバラであるため、いい品質の豆と、悪い品質の豆がミックスされているため、低品質と評価されてしまう状態を指摘しました。また仮にそういった指摘や指導を行っても、実際に現地の栽培者は行うかどうか不透明であり、文化的なギャップもあるため、そういった観点でも障壁があることがわかりました。

また東京に滞在中は、銀座の無印良品やGU(GUの服が彼らにとって安いと感じるのは衝撃でした)や、葛西臨海公園で東京湾を視察(ルワンダが内陸国であるため)したり、カルディや新橋のドン・キホーテ、近未来科博物館などを案内しました。彼らにとってどの様に感じたかは、わかりませんが、将来的にルワンダにおける発展、開発、平和に対するモチベーションとなったら幸いです。



Claver

REFLECTING ON DEVELOPMENT,ITS IMPACT ON ENVIRONMENT AND COMMUNITY AND SUSTAINABILITY – RWANDA AND JAPAN.

The mission of this conference on Rwandan side was:

Reflecting on developments and its impact on environment and community and sustainability Rwanda and Japan.

This conference was a self mirror for both Japan AND Rwanda as a developing country.We took a journey to the future, where most if not all developing countries are holding.

We learned how japan society faced challenges led by development through different techniques and technology which ultimately poised japan to the new environmental friendly mentality in managing different challenges.

As JRYC works under 3 main objectives, our report will tackle this area of interest.

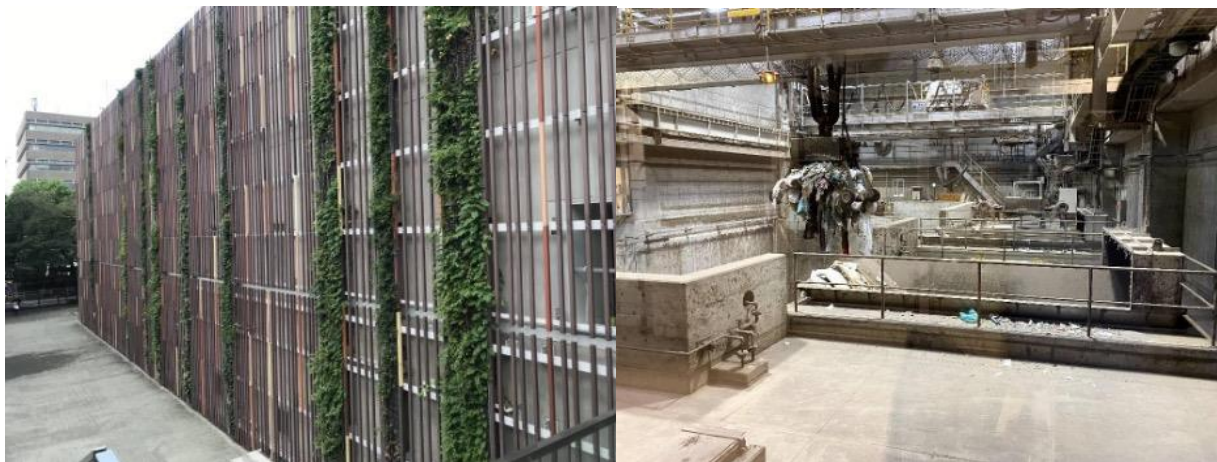
COLLABORATIVE PROJECT, ANNUAL CONFERENCE, STUDY TOUR.

COLLABORATIVE PROJECT

GREEN ENVIRONMENT

MUSASHINO CLEANING CENTER

The cleaning center is designed to change the so called waste into usable environmentally friendly products. Musashino cleaning center turns waste into electricity and cement which contribute to the development. This center is an iconic cleaning center in JAPAN that Rwanda should learn from through country bilateral cooperation and or youth cooperation programs like Japan Rwanda Youth Cooperation.



With advanced technology, Musashino cleaning center capacitates almost all district wide waste which optimizes the land use. It is impeccable to look at its outer view which serves like Rwanda Radisson blue hotel.

It is located in the city which is controversial to what we know in Rwanda, the waste should be far away from residence. This set this center as a number one example to rely on in terms of waste management.

STUDY TOUR

JICA, Japan International Cooperation Agency (JICA) is an implementing agency of Japanese official development aid (ODA) for the purpose of supporting the socioeconomic development, recovery or economic stability of developing regions

Through different conversations AYUMU UCHIDA, the JICA representative of Rwanda, sheds light on the area of collaboration with Rwanda which are education, Agriculture, Infrastructure and Technology.

JICA vision : Leading World with Trust. Mrs AYUMU highlighted most of the leading projects JICA currently in progress in the area of Technology and Education.

JICA mode of collaboration is based on mutual benefits and understanding. Most importantly, JICA allows the active participation and engagement of the country's citizens and local community which allow them to serve their priorities as they want.



EMBASSY OF RWANDA IN JAPAN

National museum of science and innovation

Ambassador Eleneste RWAMUCYO appreciated this youth cooperation between the two countries and proposed more inclusion of many members and more universities.

He also called upon Japan youth presence in activities of the embassy of the Republic of Rwanda in Japan and confirmed future cooperation of the Association.



Alia

ALIA'S REVIEW OF THE CONFERENCE

The Japan-Rwanda Youth Cooperation Conference held in Japan was an enlightening and collaborative event. It offered us a unique platform for young minds from both countries to exchange ideas and foster cross-cultural understanding.



cross-cultural understanding

It was impressive to witness the enthusiasm and innovative thinking of the participants. The event's focus on practical solutions and cooperation between Japan and Rwanda's youth is a promising sign for future bilateral relations. Overall, it was a successful and inspiring conference that showcased the potential for youth-led initiatives to drive positive change in both nations.

5 章 協賛、後援

協賛(助成)

公益財団法人 双日国際交流財団様

公益財団法人 三菱 UFJ 国際財団様

後援・ご協力

駐日ルワンダ大使 アーネスト・ルワムキョ大使様

駐日ルワンダ大使館の皆様

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター ボランティア・コーディネーター
立教大学異文化コミュニケーション学部 助教
小峯茂嗣先生

おわりに

この度は、2018年以來5年ぶりにコロナ禍を経て日本で本会議が開催できたことを大変嬉しく思っております。何よりもこうして多くの方々に、私たち日本ルワンダ学生会議の活動にご理解頂き、ご支援、ご協力して頂けて無事に履行することができました。携わっていただきました全ての方々に厚くお礼申し上げます。

今回の本会議は、日本から遠く離れたルワンダの大学生と対面で交流することで、弊団体の活動理念である相互理解を体現するイベントでした。

「発展の弊害を再考して、両国の今後の発展のあり方を考える」というテーマのもと環境問題、家族とコミュニティ、伝統文化といった観点からプレゼンテーションとディスカッションを行いました。ルワンダには、急速な発展に伴う「ICT立国」などの華やかなイメージを持っていましたが、基幹となる内需産業が少なく、大学を卒業しても就職先が少ない現状があるそうです。なぜ、日本では雇用があるのか？と聞かれた際には正直戸惑いました。人口が減少しているからと答えましたが、日本人にとって当たり前を感じることも、国のおかれている状況によって捉え方が違うことを感じました。ルワンダは起業しやすいアフリカの国として有名ですが、そうした背景から、現ルワンダ側代表のように自ら事業を興す意識が全体として芽生えるのでしょうか。

初めての日本でルワンダ側メンバーが、この招致事業のあらゆる活動を通して様々な新しい刺激を受けている様子を見ることは日本側メンバー一同大変嬉しい機会となりました。また、ラーメン、寿司、お好み焼きなど日本の多様な食文化に果敢に挑戦している姿が素敵でした。そして新宿に連なる高層ビルの高さ、東京の交通網の複雑さは電車がないルワンダではありえない光景だそうで、とても驚いている姿が印象的でした。様々な訪問先でも純粋な疑問をもち質問してくれたことで、私たち日本側も想定していなかった視点や学びを得ることができ、より深く勉強できたと感じています。

こうして、改めて日本の文化や習慣といったものを認識する機会となり、大変有意義な時間となりました。

最後に、このような充実した2週間を送ることができたのは、多くの皆様のご協力あったからに他なりません。活動を助成してくださった双日国際交流財団と三菱UFJ国際財団の皆様、資金援助をしてくださったOB・OGの方々、顧問の小峯先生、招致事業のご助言を下された日本側OBの古屋様、ホームステイを受け入れてくださった皆様、深く感謝申し上げます。また招致の活動として訪問を快く受け入れて頂いた、埼玉県立浦和商業高校太鼓部の皆様、ダイキン工業の皆様、JICA 東京の皆様、武蔵野クリーンセンターの皆様、ルワンダ大使館の皆様、株式会社ミカフェートの皆様、本当にありがとうございました。

石田真輝(東北大学2年)